

2024年/7月学習会の案内 第65回「資本論を読む会」

7月30日（火曜日）午後6時30分
—Zoomで開催しています

「第24章 いわゆる本源的蓄積 第1節本源的蓄積の秘密＋第2節農村住民からの土地の収奪」 [岩波文庫(三)p339-p372]。

6月25日の「資本論を読む会」はスタート時は7名、「今日は少し淋しいかも」との話も出ましたが、遅れて参加した人を含めて11名になりました。目標としてきた“資本論第1巻”も終わりが見えてきました。今回は第23章第5節の「f アイルランド」。イギリス資本主義の植民地だったアイルランドの急速な農業革命（封建的農業から資本主義的農業へ）が25年間で▼272万人もの人口減少を生み、その多くが「米国へのアイルランド移民」となったことが報告されています。農業革命（土地の収奪）を通じた資本主義の本源的蓄積の問題は、次回7月からの最終章の「第24章 いわゆる本源的蓄積」でも再度取り上げられます。

話題となったのはアイルランド移民でも有名なケネディー族、ビートルズのポール・マッカートニーなど。ちょうど天皇訪英中のイギリス王国(United Kingdom)

の民族問題(イングランド、アイルランド、ウェールズ、スコットランドの4大民族)はサッカーチームも4つ。アジア人から見て分かりにくい白人系の民族問題ですね。

終了後の懇親会では、直近の話題-七夕投票の東京都知事選の選挙情勢や沖縄県議会選挙結果をどう見るかなど、まじめに話し合いました。

8月には「その後のピケティ」別教室を開きます。「21世紀の資本」を書いたピケティが10年後の現在、マルクスに親和的な姿勢を見せるようになり、「新たな社会主義」の必要性を主張するに至る変化を伺えることができれば良いのですが…。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/> 「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Takちゃん



Special Study No. 2 8月26日(月) pm6:30-

Theme 「その後のピケティ」

主催=「読む会」 レポーター・SatoJin 他

第23章第5節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解 fアイルランド

アイルランドの問題：移民による人口減少。人口が1841年822万人から1866年には550万人に、1801年水準に減少した(▲272万人)。移民は51年-65年で159万人にのぼる。借地農場は、中・大規模農場数は増加したが、小規模は消滅したため、総農場数は減少した、これ家畜と人間との生活手段を供給する農耕では大体において生産物量の減少が伴った。

1846年飢饉は100万以上、ただし貧乏人だけを殺したが、国富には少しも損害を与えなかった。その後20年続く人口流出は、戦争などのように人間とともに生産手段をも激減させた。アイルランドは、貧民を遠方に移民させるという、全く新しい方法を発見した。合衆国にわたった移民は、残留者の旅費を送金し、今年の移住者は来年の他の一団を呼び寄せる。かくて移民は、国内費用が不要な、輸出貿易の最も有利な部門の一つをなす。

農村の賃金はこの20年で50%ほど高くなったが、生活必需品の価格は約2倍に騰貴した。以前は自分の土地での生産物が消費財と商品販売による取得貨幣になったが、今では賃金

アイルランドは350万人口でもまだ貧乏である。欲望の発展による豊かな食欲を満たすには、「イングランドの牧羊場」という真の使命を果たす人口になるまで、人口減少はまだイギリスは1815年穀物法により、大ブリテンへの穀物の自由輸出の独占権をアイルランドに与え耕作を人為的に助成した。しかし、1846年に穀物法廃止により、この独占権は突然除去されたことだけでも、耕地の牧場化・借地農場の集積・小農の駆逐に一大飛躍を与えるに充分である。1815年から1846年までは、アイルランドの土地の豊穡が讃えられ、その自然そのものが小麦栽培に好適の地であると声高に宣言されているのに、その後には、それが緑草飼料の生産以外には何にも適しないことを発見する！